

目が覚めたら、朝だった。とても気分が悪く、少し汗もかいている。ここは妖怪の山の中腹で、肌寒さすら感じさせる空気なのかとあつては、暑さのせいにはできない。昨日の夜は、宴会もなかった。すなわち、二日酔いでもない。

思い当たる節といえ、そうそう、昔の自分の夢を見ていたような気がする。しかとは覚えていないが、ああ、夢見の悪さが影響したか、とひとり納得する。嫌いなものの夢を見て気分が悪くなるというのなら、特に不思議さはない。はつきり言ってしまうと、私は昔の自分が嫌いなのだ。

起き上がるようにしたが、どうにもしんどい。とりあえず掛け布団を少しずらして、冷気を取り込んでみた。次に、ゆっくりと深呼吸をして、心を落ち着かせる。神社の、特に朝の神社の空気は清冽で、呼吸するたびに体から毒気が抜けていくような感じがする。何度か繰り返して、そろそろ大丈夫かと思ひ、体を起こす。軽く動かすと、じんわりと血液が体中をめぐるように感覚が出てきた。とりあえず、早くさっぱりしたい。障子を開いて部屋から出ると、太陽は見えているが、雲も多い。山の天気が変わりやすいのは本場で、今日のような日は油断できない。

お風呂でも沸かそうか、そう思いながら歩を進めると、不意に首筋あたりに、何かひんやりとしたものがびたつと貼りついてきた。

「……っ！」

危機一髪、何とか声を上げることが避けられた。朝っぱらからこんなことをするような奴は、あいつしかない。

「小傘っ！」

振り返ると、そこには思ったとおり、オッドアイのからかさお化け。この妖怪、人間に害を与える存在ではないのだけれど、とにかく人を驚かそうとする。それが、船の異変の折に出会って以来、私を驚かそうとして神社にたびたびやってくるのだ。見れば、今日は釣り竿の先にこんにやくらしきものを引っかけていて、どうやらさつき貼りついてきたのはあれのようである。

「どう、驚いた？」

驚いた？ じゃない。普段なら冷たい視線を刺し通すぐらいで済むけれど、今日は虫の居所が悪かったのか、とても腹立たしい。風の力を借り加速して、小傘の足を取り、庭に向かって投げ上げる。

「うわっ！」

「奇跡『客星の明るすぎる夜』！」

「ちよつとまつ、ちよつ、話せば判るつて——」

——問答無用。

彼女もあれで妖怪だから、この程度でどうこうなるわけではない。ちよつと庭の真ん中で伸びている程度である。こつちは朝から気分が悪いというのに、能天気の人に驚かそうとして、とにかく腹立たしい。

「朝なのに夜つてどういうことよ……」

「気にしたら負けです。そして気にしたので負けです。だから帰つてください」

「うわなにこのつめたさ」

自分のなかのいらいらが、どうも語調を鋭くさせる。参つた。自覚はあるけど、止められそうにない。

「あと毎回驚けないのでいい加減やめてください」

「しくしく。やつぱり私に価値なんかないのね」

「ありません。ないどころか迷惑です」

まさかここまではっきり言われるとは思わなかったのだろう。意外そうな目をしてこちらを見つめてきて、それがまた、いらつとくる。なぜだか今日は彼女の拳動のいちいちが癪に障つて、これ以上は本当に退治しかねなくなつてしまう。

「とにかく、貴方のくだらないお遊びにつきあつてい  
る暇はないんです」

そう言い捨てて、呆然とする小傘を後にした。

S

それからは、沸かしすぎて熱くなったお風呂に入つたり、朝食の用意をしても、ついつい材料をざくざくと切りすぎて途方にくれたりや散々であった。小傘はといえば、いつの間にか姿を消して、私は、もやもやとした感じを持て余したまま、庭を掃いていた。傍から見れば無心に見えたかもしれない。けれども、私の心を占めていたのは小傘である。私は丹念に庭を掃き続けた。まるで、彼女がいた痕跡を残らず消してしまおうとするかのように。

ついに掃くべきところも無くなつた庭を後にして、掃除、洗濯と一通り終えた頃には、太陽がかなり高くなつていて、思ったより時間が過ぎていたようである。神奈子様は山の会合とやらに出ているため、夕方近くにならないと戻つてこない。諏訪子様も神社にはない様子だけど、裏手を上つていったところにある池の近くにすることが多い。一人でいると気が滅入るから、ちよつと相手をしてもらおう。そう思い立ち、社務所